
雪の華

樋川真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の華

【Nコード】

N2214C

【作者名】

樋川真

【あらすじ】

老婆の1人語り。栄誉とは時として残酷な姿をしている。

時として栄誉は残酷な姿をしている。

それを求めてやまない者の許には届かず、求めてもいなかった者の手許にやってくる。

栄誉の話を語ろうと思う。

そう言って老婆が語りだした物語はすぐには全貌がつかめなかった。

老婆には夫がいた。年老いてともに暮らしていたが夫の方が先に召された。

老婆は若い頃に病気に罹りその病とともに生きた。

老婆が夫と出会ったのは老婆がまだ17才の時だった。夫は20才だった。

現在の医療でも老婆の病気を治すことはできない。悪化を鈍らせる事しかできない。

その病に罹っていたのは夫も同じだった。

ある年の大晦日の夜、街に出た老夫婦は降り積もる雪の中をただひたすら歩いていった。

老婆は老人の腕をとって空を見上げた。

私はあなたより先に召されるでしょう。あなたは私が召されてもゆっくりと私のところに来てください。私は待っています。

老人は妻の方を振り返り言った。

順番から云えば先に召されるのは私の方だ。私がいなくなってもゆっくりと生きるんだよ。私は待っているよ。

妻は老人の腕をとりながら微笑んだ。

一青窈のハナミズキが流れていた。

妻は足を止めてその歌声に聞き入った。

老人も立ち止まり妻と一青窈を聴いた。

いい歌ね。なんて歌かしら。

一青窈のハナミズキだよ。

あなた、私たち随分生きてきましたけど、今までになるまでに色々ありましたねえ。

そうだな。

本屋の前を通りかかった二人は中に入った。

細木数子の顔写真入りの本が平積みされていた。

その本の横に沢村阿美のなんちゃってジェントルマンが一冊残っていた。

あらまあ私の本まだ売れるんですねえ。

妻はなんちゃってジェントルマンを手に取って笑った。

老人は財布から二千円札を出して妻に渡すと言った。

この本はとうとう手許に残らなかつたね。ここで出会ったのは一冊ぐらい手許にあった方がいいだろうって神様がおっしゃっているんだよ。買っておいで。

妻は笑って本を本棚に戻すと言った。

なんちゃってジェントルマンが売れたから私たちは生きてこられたんです。それは私たちの手許に残らなかつたからです。この一冊もこの本を必要としている人の所に行くのがいいんです。そう言って妻は二千円札を老人に返した。

とうとう貴方の本は一冊も出さじまいですねえ。
まあそういうものだ。

本屋の窓の外は雪が降りしきり街はやわらかな白いヴェールに包まれ、街灯が積もった雪を明るく照らした。

雪の華が歩道に舞い散り、風が雪の華を夜空に舞い上げた。

沖縄では雪は降らないわよねえ。

我部祖河のソーキそば、もう特盛りは二人がかりでも食べられないだろうね。

一青窈のハナミズキが流れていた。

薄紅色の熊のぬいぐるみが本屋のショウウィンドウに飾られていた。

なんちゃってジエントルマンは映画にもなつて。そのテーマがバンドネオンの旋律でって言い張ったのはあなたでしたのよ。

バンドネオンの哀調の旋律が老夫婦を包み込んだ。

そうだったなあ。

そうですね。私は一青窈のハナミズキでって言ったのに、ハナミズキはラストの方で使われて。本当は最初の方でも使ってもらいたかったのに。

雪の華ですよ、あなた。雪に埋めると死んでしまいますけれど、雪って綺麗ですよね。

雪の華はハンス・アンデルセンの物語にも出てきそうだね。

老婆は老人が小説を書くので、それを見よう見まねで小説を書いてみてそれが一冊の本になった。その本は随分長い間読み継がれ、売れ続け、老婆の名は国中に知れ渡った。

老人の小説はネットで細々と発表されるだけで売れることも本になることもなかった。

車がスリップして歩道に突っ込んできた。老人は妻を突き飛ばし車に撥ね飛ばされた。

路面には血と油が流れ、サイレンが鳴り響いた。

老人は楽器屋の下で倒れ伏しそこで動かなくなった。

妻は救急車に促され病院で老人の名を尋ねられ沢村匡と夫の名を告げると待合の椅子に座り込んだ。

遺影と向かい合いながら老婆はそう言って話し終えた。

なんちゃってジエントルマンと少し違っただけだけど私は老いさらばえてまだ雪の華を見えていますよ。

老婆はそう言って街に出た。

あなた、そっちは雪ですか。私は雪の華を見上げてあなたを思い出していますよ。あのハナミズキを聴くとあなたの言っていた事を思い出しますよ。

あなたが召されてからどれぐらい雪を見たでしょうか。

でももうすぐ会えますね。神様が私をお召しになったようです。

本屋には沢村阿美のきまぐれレディが直木賞受賞と広告付きでうずたかく積まれていた。

なんちゃってジエントルマンもその横で平積みされて並べられていた。

その本屋の前の歩道には老婆の行き倒れが雪に埋もれていた。

雪の華が風に舞って輝いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2214c/>

雪の華

2010年10月9日02時31分発行